

2 学期終業式校長講話

○今年の漢字

12月12日（金）に公益財団法人日本漢字能力検定協会が、今年1年を象徴する漢字を発表しました。この行事は、1995年から行っていることで、すでに30年以上継続している年末の恒例行事になりました。ここ10年の「今年の漢字」は、2016年が「金」でこれ以降、「北」、「災」、「令」、「密」、「金」、「戦」、「税」、「金」と10年間で金が3回入っていました。

今年の漢字は「熊」でした。熊を巡っては今年、市街地にも出没してイベント中止や学校の休校などで住民生活に影響を及ぼし、人的被害が相次いだのに加え、漢字で「大熊猫」と表記されるパンダの中国返還にも注目が集まったことからだそうです。このことは、クマに限らず、イノシシやシカなどの野生動物が、人間の住む世界に入り込んで、様々なトラブルが起きていることと、人間と野生動物との共生・在り様を見直す機会にする象徴的な漢字だろうと私は思います。2位は「米」でした。米の価格高騰や、米国のトランプ大統領就任などが理由になっています。1位とは180票差だったそうです。

○デフリンピックを終えて

東京新聞のコラムの一部を紹介します。この記事は、11月15日開幕の東京デフリンピックのために東京新聞と公益財団法人・日本漢字能力検定協会が共同制作した「応援号外」に掲載されたものです。

ウィリアム・ホイ選手は130年ほど前に活躍した米大リーグの名選手です。打撃と守備が抜群だったそうです。ホイ選手は大きな財産を残してくれました。セーフなら両手を広げる。アウトなら親指を立てる。諸説ありますが、審判が判定に使う動作を大リーグが採用するきっかけになった選手だそうです。それ以前は声だけでした。ホイ選手は3歳のときに病気で耳がきこえなくなりました。野球の世界では苦勞します。審判の声がきこえないのです。ストライク、ボールの判定が分からなくて打席に集中できません。ストライクの場合は右手を挙げてほしい。ある日、思い切って審判にそう頼み、ここから判定を体で示す動作の導入が進んだといいます。これは耳の不自由な人ばかりではなく選手や野球を見る人みんなにとって大切な贈り物になりました。ホイ選手は聴覚障害スポーツについてこう語っています。「成功には試練に挑む強い心と勇気が必要です」。

第25回夏季デフリンピック競技大会（東京2025デフリンピック）」では、日本選手団は、当初の目標であった「31個以上のメダル獲得」を大きく上回る、合計51個のメダル（金16個、銀12個、銅23個）を獲得しました。

このことは、選手一人ひとりが、最高のパフォーマンスを発揮し、最後まで諦めずに挑戦し続けたことと、選手たちの限界を超えた努力はもちろんのこと、コーチ、スタッフ、そして、「共生社会の実現」という目標を共有し、大会運営を支えた多くの人々の力があってこそその成功であったと思います。また、この大会では多くの人々がボランティアとして運営を支えました。

特に本校の地元、筑波技術大学の学生の活躍がありました。筑波技術大学は日本で唯一「視覚・聴覚障害者であること」を入学条件とする国立大学です。学生の障害や個性に配慮しながら学びの場を提供し、社会的自立と社会貢献のできる人材を育成しています。現在、障害がある人を受け入れている大学も増えてはいますが、学ぶ環境が十分に整っているとはまだまだ言い難い現状があります。この「東京2025デフリンピック」を契機に、誰もが安心して暮らせる社会を目指したいものです。

○ノーベル賞受賞者

今年のノーベル賞の自然科学部門で、日本人では生理学・医学賞に大阪大の坂口志文特別栄誉教授、化学賞に京都大の北川進特別教授の受賞が決まり、12月10日に授賞式がありました。同じ年に複

数が受賞する快挙は平成27（2015）年以来10年ぶりのことです。専門的なことなので、紹介することが難しいのですが、2人の先生方の受賞理由などをあげます。

坂口志文特別栄誉教授は、「免疫の抑制に関する発見」で受賞しました。自己免疫疾患やがん治療に新たな可能性を開き、末梢免疫寛容に関する発見が評価されました。具体的には、過剰な免疫反応を抑える免疫細胞である「制御性T細胞（Treg）」を発見したことです。免疫はウイルスや細菌など外敵と、自分の体をつくる細胞を区別し、外敵だけを排除する仕組みですが、自分の細胞と外敵をうまく区別できなくなると、自分自身を攻撃して傷つける自己免疫疾患になってしまいます。制御性T細胞はその異常な免疫反応を抑える働きがあります。

制御性T細胞の働きを操作すれば、ぜんそくなどの免疫に関わる病気を治療できると期待されています。がんの治療では逆に、がん組織に集まった制御性T細胞を取り除いたり、働きを抑えたりして、他の免疫細胞にがんを攻撃させやすくする方法の研究が進んでいます。この研究は、免疫系が「攻撃」と「抑制」という二つの力の絶妙なバランスの上に成り立っていることを示し、人間の体に本来備わる“寛容”のメカニズムを解き明かすものでした。この成果が、自己免疫疾患やアレルギー、がんなどの新しい治療法につながることになるのではないかと期待されています。

北川進特別教授は、「金属有機構造体（多孔性金属錯体：MOF）の開発」で受賞しました。金属イオンと有機分子を組み合わせ、内部に規則正しい微小な孔（あな）を無数に持つ新しい多孔性材料（MOF：Metal-Organic Frameworks）を開発したこと、それによって「配位空間の化学」という新たな分野を創出したことです。金属イオンと有機化合物とを結合させて、ナノメートルサイズの規則的な孔を無数にもつ新しいタイプの多孔性材料（多孔性金属錯体：MOF）を開発しました。このような材料の細孔中に気体を大量に取り込むことができることを初めて立証し、これをきっかけに、種々のMOFによる水素や天然ガスの大量吸蔵を行う研究が世界中で盛んに行われるようになりました。このMOFは、気体の貯蔵や分離、さらには違う性質を持った気体への変換のための触媒としての利用が期待されており、二酸化炭素の回収や水素の貯蔵など、無機・錯体化学はもとより、今日のエネルギー、環境、生命などの問題に対し、今後の応用に広い可能性を秘めているということです。

○陸上競技・駅伝部全国大会に出場

明後日21日（日）に駅伝部が、茨城県代表として第76回全国高校駅伝に出場し、都大路を走ります。10月26日の茨城県大会では、県の最高記録を更新する2時間5分2秒の好成績で2年ぶり3度目の県代表を勝ち取りました。本来であればここで壮行会を行いたいところでしたが、すでに選手たちは京都入りして、実際のコースで練習しています。本校からも21日の当日、応援団約70人が京都に行きます。京都に行けない人たちはぜひテレビで応援してください。駅伝部の健闘を祈りましょう。

○終わりに

先ほど紹介した、ノーベル化学賞を受賞した北川特別教授は、受賞の知らせを聞いたときに、パストールの「幸運は準備された心に宿る」という言葉を紹介しています。また、ホイ選手は「成功には試練に挑む強い心と勇気が必要」といっています。駅伝部もそうですが、様々な取組や準備をして、試練に挑む強い心と勇気をもって、臨むことで幸運はやってきます。3年生はこれから本番になる人も多いことでしょう。皆さんも自分の夢や理想に向けて、多くの準備をするとともに、強い心と勇気で幸運をつかむ努力をしましょう。